

2022 年 3 月



親切会

関東支部便り (No.18)

連絡先：〒101-0032

東京都千代田区岩本町 2-9-6

ゆいまーるひたち 4 階

電 話：070-3603-2172

メール：shinsetsukai-honbu@hdq.hitachi.co.jp

第 18 回支部幹事会を開催

東日本大震災から 11 年目を迎え、またロシアのウクライナ侵攻の情報に接し、多くの人命が失われ、生活が奪われている事実を知る中で、併せて多くの方から支援の募金が集まっていることも知ります。世界のボランティア精神の大きさに感動を覚えると同時に、その一角を担う親切会活動を改めて見つめ直したいと考えます。

新型コロナウイルスは 3 回目のワクチン接種が進み、感染者数もようやくピークを過ぎ、ウイズコロナの日常生活が求められています。

その中であって、第 18 回支部幹事会は 3 月 16 日(水)15 時から開催されました。まず、鈴木支部長から「昨年度の活動実績を報告する中で、その経験を生かして今年度の活動計画を審議して下さい」と挨拶がありました。続いて 2022 年度の支部予算案の提案、活動計画の審議・承認を得ました。

活動計画の柱として、「寄附先訪問」、「善行者表彰」、「親切会ホームページのリニューアル」について提案があり、次回具体的な審議を行います。また、新しい試みとして連合東京「子ども、若者支援プラットフォーム(HOPE)」と連携して、災害備蓄品を子ども食堂などに紹介する活動を計画しています。法人会員の日立グループ各社に協力を呼びかけ、災害備蓄品の提供をお願いする予定です。法人会員の離脱やコロナ禍のための歳末募金活動の減少に伴う会費収入の漸減対策としては、新たな法人会員の開拓とともに、新たな寄附の開拓を検討します。当会活動 PR のためのホームページの改訂は少し遅れましたが、5 月中には新しい HP となる予定です。

新型コロナウイルス、自然災害や国際紛争などが発生し、支部活動にも新たな転機が訪れていると認識し、幹事一同新たな気概で活動に取り組む所存です。

次の開催は、6 月 16 日(水)を予定しています。

個人会員	年会費	2,000 円
法人会員	年会費	36,000 円



(上記便りの連絡先)にご連絡いただければ申込書(払込用紙)を送らせていただきます。

個別ご寄附のほか、お仲間の懇親会の残金などのご寄附を頂けるときは、事務局までご連絡願います。

コロナ禍の寄附先訪問活動

(シャインオンキッズ)

長引くコロナ禍で、依然 “生活全般に亘って” かつての日常” に戻れない状況が続いています。当支部の寄附金をお届けする訪問活動も制約を受け、見合わせを余儀なくされて来ました。

ただし鎮静化した昨年 12 月に細心の注意を払いながら、2 年ぶりに再開へとこぎ着けました。各所に直接伺って近況を確認させて頂き、久々に会話できる喜びを感じた次第です。

今回はそのうち、認定 NPO 法人シャインオンキッズ(以下 SOK)を紹介致します。SOK は小児がんや心臓病等、重い病気と闘う子供たちに寄り添い、不安や痛み、ストレスを緩和する「ファシリティドッグ」の活動を支援している団体です。ファシリティドッグは特別な訓練を受けた犬であり、特定の病院や医療施設に常駐し、準医療スタッフとして活動しています。勿論、入念な安全対策を施した上で、入院中の子供たちとの触れ合いや添い寝、手術や検査の際の付き添い、リハビリ支援等々を日常業務としております。傍らにいて、薬を飲めない子や食事が進まない子へのサポートもあります。コロナ禍で家族の面会すら制限される中、子供たちの寂しさを和らげる面でも、むしろ従来以上の貢献ができているのだろうと思います。



このファシリティドッグは 2010 年に静岡県立こども病院に初導入され、以降 12 年 神奈川県立こども医療センター、19 年 東京都立小児総合医療センター、21 年 国立成育医療研究センターへと拡大しています。

SOK では全国の小児がん拠点病院に相当する 15 施設への導入を目指しているとの事。しかし 1 施設で年間約 1,000 万円の運営費などの資金調達は大きな課題。重病の子に犬が寄り添うことの医学的効果を紹介しつつ、WEB も含めて幅広く寄附依頼を進めているとの説明です。当親切会のささやかな寄附が少しでもお役立ちでき、更に支援の輪が広がるよう願っております。

(会田豊治 記)



2021 年度 寄附先訪問報告

昨年はコロナ禍にあつて、寄附先施設の活動も大幅に制限されました。例年幹事で手分けして寄附金をお届けしてきましたが、訪問もできず、寄附金の贈呈は金融口座への振り込みで対応しました。

今年は東京五輪・パラリンピックまではコロナウイルスの感染が拡大してきましたが、緊急事態宣言の解除後は急速に感染者が減少し、各施設でも諸活動が徐々に回復してきています。

寄附先への対応はコロナ感染状況を見ながら、11月に寄附先への連絡、12月に入って各幹事が分担して寄附金のお届けに参りました。コロナ禍での活動を制限されながらも工夫をして活動されている状況が確認されました。

今回は19の施設・団体に支部幹事が分担して、コロナウイルスの感染に注意しながら、善意の寄附をお届けしました。高風子供園（横浜市）からは施設の子供たちから寄せ書きを頂きました。



高風子供園からの寄書き



みなみひまわり学園
(ひたち育成会)



共働学舎



あけぼの学園



あさやけ作業所



いのちの森づくり友の会



東京善意銀行

善行者表彰（林田雅之氏）

～会社生活の終了後は障害者支援活動に～

今回、善行者表彰を受賞された林田雅之氏は、1976年トキコへ入社し、一貫してベビコン事業における、新規事業の開発、立上げに従事。2007年7月トキコマレーシアの社長に就任。マレーシアで知的障害者の工場実習を受け入れたのを機に、会社生活を終えた後、障害者支援活動につきたいと考え、退職前から自宅のある地元企業（研進）にアプローチし、帰国退職と同時に就職した。同社の出縄社長が林田さんの経験を考慮して、会社を取り組んできた「いのちの森づくり」プロジェクトを任された。

（株）研進・（福）進和学園の「いのちの森づくり」活動は、2006年、故宮脇昭先生（横浜国立大学名誉教授）から先生が提唱される潜在自然植生理論に基づく「その土地本来の木による本物の森づくり」の植樹指導を頂いた。それを機にどんぐりや木の実から植樹用のポット苗を栽培し植樹を実践するプロジェクトがスタートした。



林田さんは、2013年に（日立産機）退職と同時に本活動に加わり、さらに世の中に普及させるべく2014年より学校・公共スペースへ植樹提案を行い、生徒と植樹をすることによる「環境」、生徒へ植樹の大切さ、植え方を教える「教育」、障害者の苗木栽培と植樹の仕事を確保する「福祉」、の連携を作り出すことに尽力してきた。

現在、地球の規模で温暖化が進行し、CO2（二酸化炭素）の濃度を如何に低減させるかが重要な課題とされ、人類共通の「環境」問題への対応としても樹木を植える活動は、非常に重要な活動である。いのちの森づくりの活動は、まさに ESG・SDGs そのものであり、第一線で活動していることに敬意を表する。これまでの提供苗木本数は13万本、出荷本数31万本を数える。

植樹の関係で小学校との付き合いが深く、地元平塚市の花水地区町内福祉村の「花水わくわく教室（小学生対象）」では進和学園の仲間と「どんぐりの育て方教室」を開催。また子供の時からマレーシア時代まで趣味の蝶類については造詣が深く、「アゲハの育て方教室」も開催している。

3月17日（木）、表彰状授与のために、鈴木支部長はじめ3人で平塚市のご自宅を訪問した。マレーシアで採集されたたくさんの美しい蝶の標本を見せて頂き、氏の造詣の深さに感銘した。また、平塚市に住むインドシナ難民や日本語を母語としない市民に日本語を教えながら、生活のお困りごとでも解決し、自立と共生を図ることを目的に活動している「カベラ日本語の会」の代表もされ、氏の幅広い活動に改めて感銘を覚えた。（楠本安男記）



外国籍(がいこくせき)の皆(みな)さんが地域(ちいき)社会(しゃかい)に なじんで生活(せいかつ)できるように、
日本語(にほんご)に限(かぎ)らず、日々(ひび)の生活(せいかつ)をサポートしています。

We support non-Japanese (foreign)
residents' daily life in the local society,
not only through Japanese